



図版1 歌川芳虎画「麻疹後の養生」



図版2 歌川芳艶画「はしかまじないおしえ宝」

「はしか絵」(日文研・宗田文庫より)

歌川芳虎画「麻疹後の養生」文久2(1862)年

歌川芳艶画「はしかまじないおしえ宝」文久2(1862)年頃

江戸時代には幾度となく麻疹^{はしか}が流行した。とりわけ文久2年に発生した麻疹は猛威を奮い、コレラ流行を経験した数年後の大惨事に、民衆間では大いに混乱と社会不安が掻き立てられた。麻疹による擾乱のさなか、同年の春夏には麻疹の予防や心得、病後の養生法などを附した「はしか絵」と称する錦絵が次々と刊行されていく。人々は忍び寄る脅威からの回避や救済を神々に求め、その様子は「はしか絵」にも反映された。「麻疹後の養生」では、疫病神と化した「麻疹」「ころり(コレラ)」「痢病(赤痢)」を、鐘馗たちが退治する。鐘馗は、日本で疫病除けの神としても信仰を集めている。添えられた詞書では、赤斑を伴い人体の皮肉間に発症する麻疹は、食養生を怠ると他病を併発し、死の危険性もはらむと警鐘が鳴らされる。「はしかまじないおしえ宝」では、麻疹による喉の刺激に効果的な金柑と、麻疹除けのまじないに用いる飼馬桶・麦が擬人化され、三者は着物姿でそれぞれの効力について唱え合う。詞書末尾に附された「麦どのは生れぬ先にはしかして かせたる後は我身なりけり」というまじない歌は、麻疹封じの神として知られる麦殿大明神に由来し、「麻疹軽くする法」「はしかのまじなひたらやうの葉」など、その他の「はしか絵」にも用いられている。(解説: 光平有希)